

(3) 鑄造遺物

金井遺跡B区第二次調査において、鑄造遺構群を検出した。各遺構から出土した鑄造遺物は分類し計量した。分類は、金井遺跡B区第一次調査の調査報告書に準じる(1996 赤熊)。

今回の調査における鑄造遺物の総遺物量は86,016gであった。各分類ごとの出土量は、鉄滓38,126g、白色滓・その他の滓1,246g、炉壁31,150g、鉄塊1,005g、羽口9,680g、木炭84g、鑄型375g、石5,812g、鉄製品25gであった。鉄滓が全体の44%、炉壁は36%、羽口は11%、石は7%、白色滓・その他の滓、鉄塊はそれぞれ1%を占め、その他は1%以下であった。この傾向は調査地点が鑄造遺物の廃棄場として利用されていたものと考えられる。

鉄滓は、鉄滓1～5および白色滓、その他の滓の7類に分類した。鉄滓1は一般的な鑄造滓である。色調は黒色で光沢をもちガラス質である。断面には白色の粒子を多く含む。鉄滓2は錆化滓とも呼ばれる滓で、滓の外表面には錆が付着している。鉄滓3は滓の外表面に土砂が付着した滓である。鉄滓4はガラス質の強い滓である。光沢をもち黒色である。鉄滓5は鉄滓4に比べ、よりガラス化が進み鉛状に溶けた形状をしている。白色滓は滓が風化したような状態で形状は不整形である。色調は表面が白色および黄白色、断面は青灰色をしている。その他の滓はコバルトブルー、グリーン、ブルーなどの色調をもつ変色滓である。

炉壁は、炉壁1～4に分類した。炉壁1は表面に溶解物が付着し、炉壁粘土は還元面と酸化面をもつ。炉壁2は炉壁1の酸化面が欠落したものである。炉壁3は表面の溶解面に白色滓と同様の白色溶解物が付着するものである。炉壁4は表面に緑青が吹くものである。

鉄塊は、鉄塊系遺物と呼ばれ、鉄素材、鑄造鉄製品、鍛造鉄製品などを含む。溶解する原料鉄のことである。

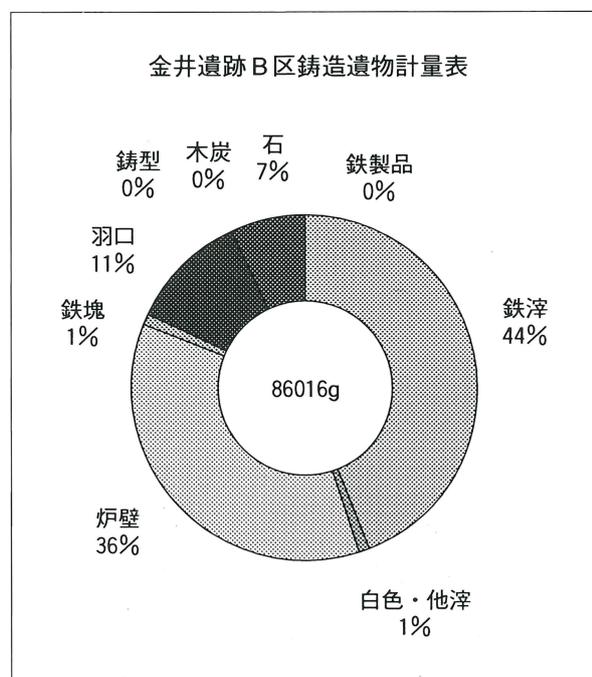
鉄塊1は検出時において金属分が残存するものである。金属探知器や磁石などに反応し金属分が確認できた。鉄塊2は金属分が失われたものである。大きさは1～5cm程度で円形および楕円形をしている。

羽口は炉壁粘土と近似するが、羽口部分の粘土は酸素を多く供給されることから色調が赤褐色である。また、溶解面は空気を送風を受け滑らかで色調は黒味を帯びる。

木炭は炭と黒鉛化木炭の両者が存在する。炭は炉内での燃え滓である。黒鉛化木炭は炉内で炭が鉄などの溶解物と化合し木炭部分が形状を崩さず鉛状に変化する。一部には磁着するものも存在する。

鑄型は、容器、鍋、獸脚を確認した。第一次調査では梵鐘をはじめとした仏具を多量に検出したが今回の調査では梵鐘鑄型は検出できなかった。

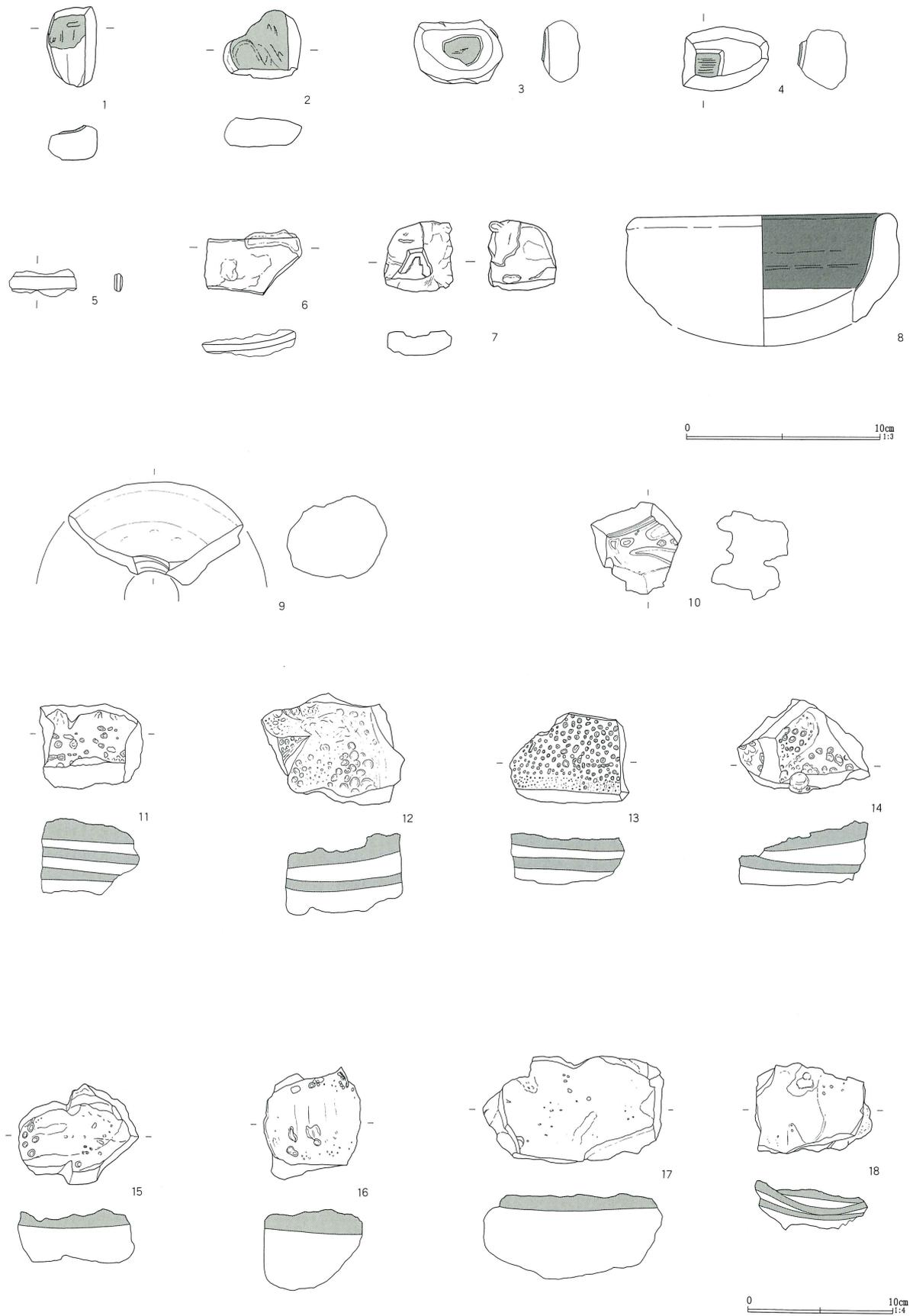
鑄造道具は、Q-10グリッドからとりべを検出した。鉄製品とした遺物には鍛造製品の刀子が検出されており、鉄素材とするよりは、道具として使用されたものと考えられる。



第1表 鑄造遺物計量表 (1) (g)

鉄滓	白色・他滓	炉壁	鉄塊	羽口	木炭	鑄型	石	鉄製品
38126	1246	31150	1005	9680	84	375	5812	25

第61図 鑄造関連遺物



第61図1～18に主な鑄造遺物を図示した。1～4は鑄型片である。1は獸脚鑄型の破片とみられる。内面の鑄型面は還元面をもち真土の残りが悪く形状を判断することができない。裏面および側面は面をもち外面を留める。「L」型の残存形状をもち全体の鑄型形状から獸脚の一部と判断した。2は鑄型の破片とみられる。内面の鑄型面は還元され青灰色になり、断面8mm程の位置までおよぶ。しかし、真土が塗られ平滑な仕上がりではなく、凹凸とザラザラ感が残る。鑄型右側には合わせの部分が縦方向に直線的に残り酸化焰の赤褐色である。裏面および側面は面をもち外面を留めている。獸脚など合わせに使用された板状の上蓋の鑄型片とも考えられる。3は容器鑄型の破片とみられる。内面はわずかな弧を描き、容器の体部にあたる鑄型片である。真土は1mm程の厚さに塗られていた。4は鍋鑄型の破片とみられる。鍋の胴部の破片と考えられ、真土は層になって塗られ、粗真土、中真土、仕上げ真土の順に塗られたものとみられる。真土の表面には黒味が塗られた痕跡が認められた。

5～7は鉄製品である。5は表面の状態から鍛造鉄製品である。刀子の破片とみられ、鑄造道具の一種の可能性もある。6、7は鑄造鉄製品である。鑄造し損

じた破片である。いずれも、鉄素材としてのリサイクル品の可能性も考えられる。

8はとりべである。推定口径13.2cm、器高6.8cm、器肉は1.5cmと厚い。内面には溶解物が付着している。外面はナデにより調整され、形態を造る。

9は不明土製品である。容器鑄型の外型の可能性をもつ。形態はドーナツ型である。中央には直径3.6cmの穴があき外径は16.0cm、厚さ5.6cmである。全体に酸化した赤褐色粘土で真土はもたない。また、溶解物の付着もみられず、二次的な被熱も受けていない。

10は大型鉄滓である。鉄滓1と分類した大型の滓である。表面には湯が流れた痕跡が付着する。

11～17は溶解炉の炉壁片である。11～14は炉底部の破片である。表面は気泡が多くみられる。また、炉の修復が行われたとみられ、溶解面が粘土の間にサンドイッチ状に塗り込められていた。15～17は炉の上部にあたる。表面には気泡が少なく、ザラザラした面が残る。

18は羽口の破片である。口径は不明だが大型のものと考えられる。内面は赤褐色の粘土、外面は黒色で滑らかな光沢をもつ湯が付着している。また、羽口も修復が行われ、三層の湯が粘土層と交互に認められる。

第2表 鑄造遺物観察表

番号	遺物種類	計測値			重量(g)	出土位置	備考	分類
1	鑄型	長さ4.1	幅2.5	厚さ1.5cm	14	SK271		鑄型 獸脚
2	鑄型	長さ3.5	幅4.0	厚さ1.5cm	16	L-11G		鑄型 容器
3	鑄型	長さ3.3	幅4.3	厚さ2.5cm	26	L-11G		鑄型 容器
4	鑄型	長さ3.2	幅4.4	厚さ1.8cm	32	K-11G P2		鑄型 鍋
5	鉄製品	長さ3.4	幅0.9	厚さ1.5cm	5	L-11G		鉄製品
6	鉄製品	長さ4.8	幅2.7	厚さ0.3cm	28	SE16		鉄製品
7	鉄製品	長さ3.6	幅3.4	厚さ1.2cm	18	SK265		鉄製品
8	とりべ	口径(13.2) 器高6.8cm			64	Q-10G	内面に溶解物付着	とりべ
9	鑄型	外径16.0	内径3.6	厚さ5.6cm	355	SE16	コンニャク状	鑄型
10	鉄滓	長さ6.4	幅5.5	厚さ4.9cm	123	SE15	白色粒子を含む	大型滓
11	炉壁	長さ6.7	幅6.7	厚さ5.0cm	157	SS17 SSK1	断面重層	炉壁1
12	炉壁	長さ7.7	幅6.4	厚さ5.1cm	223	SE16	断面重層	炉壁1
13	炉壁	長さ7.8	幅6.3	厚さ3.2cm	135	SK271	炉底	炉壁2
14	炉壁	長さ9.0	幅6.4	厚さ3.7cm	135	SE15	炉底	炉壁1
15	炉壁	長さ7.8	幅7.0	厚さ3.6cm	131	SS17 SSK1		炉壁1
16	炉壁	長さ6.9	幅6.7	厚さ5.2cm	230	SS16 SSK1	炉底	炉壁3
17	炉壁	長さ12.3	幅7.1	厚さ5.8cm	402	SB27	炉上部	炉壁1
18	羽口	長さ7.6	幅6.0	厚さ2.5cm	112	SS17 SSK1	断面重層	羽口

鑄造遺構および鑄造遺物は調査区北側のK～N-9～12グリッドを中心に検出された。なお、調査区の中央部M-9～12グリッドは未調査区であったにもかかわらず、工事用道路によって遺跡が一部破壊されてしまった。

鑄造遺構は第1次調査により15箇所の鑄造遺構群を確認した。第1鑄造遺構群は鍋・容器などの日用品と鋤先などの農具を生産、第2鑄造遺構群は鍋・容器を中心とした日用品の生産、第3・4・9・12・13・15鑄造遺構群は鉄滓、炉壁、羽口、鑄型などの廃滓場、第5・7・8・10鑄造遺構群は梵鐘の生産、第6・11・14鑄造遺構群は獣脚、仏像、飾り金具、磬、鏡などの仏具生産を行っていた。今回の調査区は金井遺跡の鑄造遺構群が展開する北西にあたり最も地形的に高い位置にある。第2鑄造遺構群の北側にあたり、第22号溝跡の西側にあたる。

今回の調査で検出された鑄造遺構は、第16・17鑄造

遺構群の2箇所と土壙、溝跡である。

第16鑄造遺構群には第1～18号鑄造土壙が存在する(第12、13、14、16号は欠番)。鑄造遺物は第1、2、15号土壙から出土している。第1号と第2号は概ね鑄造遺物の構成が近似する。鉄滓約50%、炉壁約35%、白色滓・その他の滓が約1%、鉄塊2～3%、羽口7～11%である。その他の滓にはコバルトブルー滓、緑青の付着の認められる滓、白色滓、灰白色の滓などが含まれる。こうした様相は銅の鑄造に伴う廃滓と捉えられる。また、第15号土壙は白色滓・その他の滓が非常に多く21%を占める。鉄滓26%、炉壁21%、石31%、羽口1%である。鉄滓はガラス質がやや風化した状態で非常に軽く白色滓やその他の滓も多い、滓はやや大きく軽量である。滓4、滓5と分類した滓にもぶい光沢を持ち軽い。炉壁の中には表面に白色溶解物が付着する炉壁3と分類したものが多くことから銅関連の鑄造に伴う廃滓と捉えられる。石の性格は不明である。

第3表 鑄造遺物計量表(2)

(g)

遺構名	鉄滓	白色・他滓	炉壁	鉄塊	羽口	木炭	石	鑄型	鉄製品
K11GP1	785	0	1620	5	585				
K11GP2	835	0	2480	0	250		285	30	
K11GP3	1160	0	2235	0	825			5	
K11GP4	790	0	2180	0	795		270		
L12G	110	0	35	2			5		
SB27	65	0	505	30	55	10	55	0	0
SB28	30	0	165	0	20		10		
SB29	15	0	170	16	25	1	15	0	0
SB30	25	0	25	20			1		
SD54	0	0	35	0					
SD55	0	0	0	0			45		
SD58	10	0	0	5		5	5		
SD59	45	0	30	0					
SD60	200	0	15	0	135		45		
SE15	1350	0	1050	0	300		95	95	
SK265	8796	31	1380	115	270	26	231	5	20
SK270	280	0	135	26	50		195		
SK271	1320	0	3290	0	1270			15	
L11G	5665	20	2270	45	415	10	365	50	5
SK273	0	0	355	0					
SS16SSK1	5295	155	3940	200	1275	20	240		
SS16SSK15	1185	945	945	15	65	10	1400		
SS16SSK2	7840	70	5310	495	1060		900	55	
SS17SSK1	2325	25	2980	6	2240	1	1480	120	0

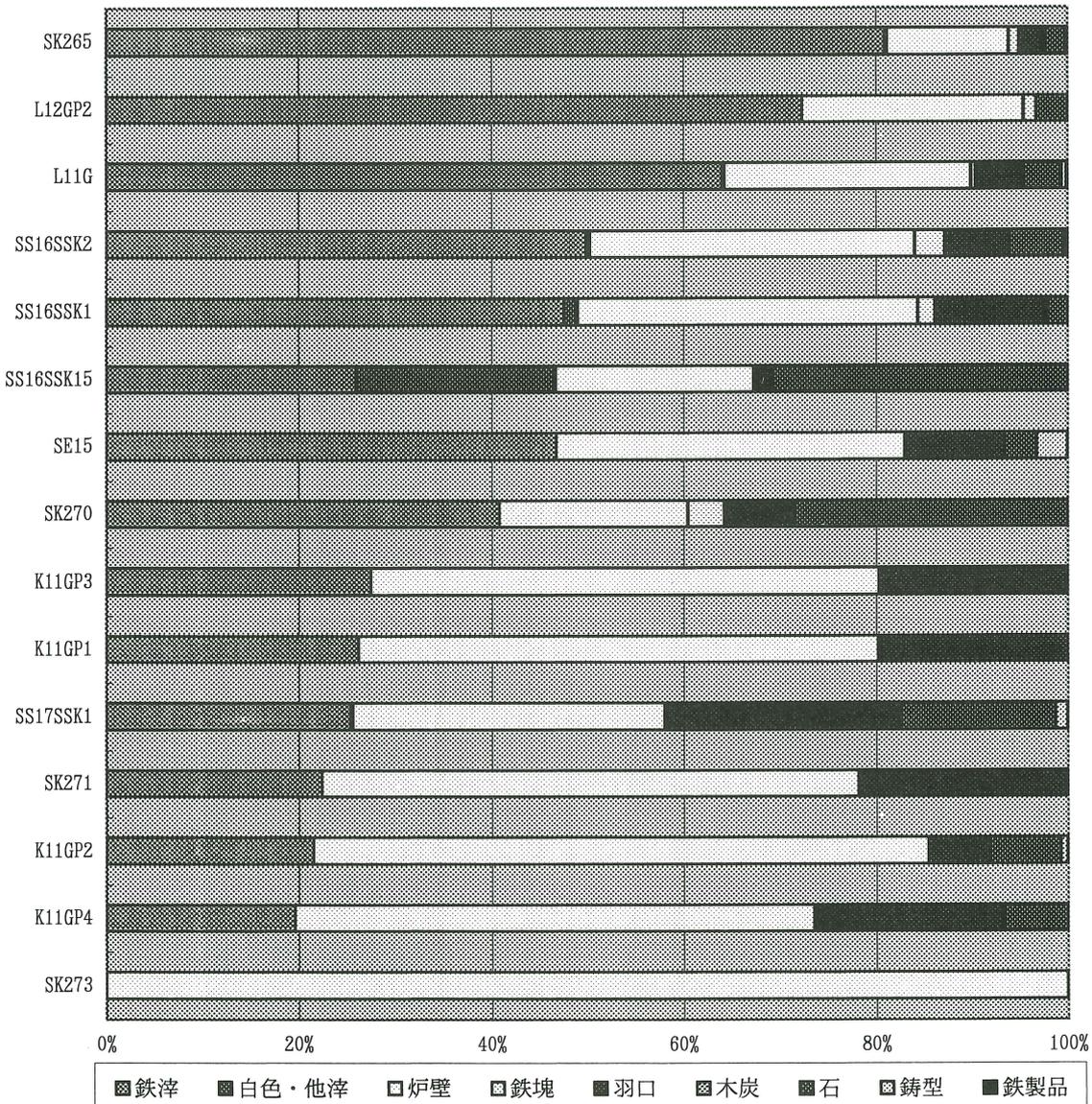
第17铸造遺構群は第1～3号铸造土壙が存在する。铸造遺物は第1号土壙から出土している。鉄滓26%、炉壁33%、羽口24%、石16%、鋳型1%である。鉄滓がやや多いが、炉壁と羽口の占める割合が多く、廃滓と共に炉壁の捨て場として捉えられる。

土壙は第265、270、271、273号から铸造遺物を出土している。第265号は铸造遺物の構成において、鉄滓が70～82%と非常に多い、次いで炉壁が13～25%、羽口が2～4%である。鉄滓を主体とした廃滓場である。第270号は鉄滓40%、炉壁20%、羽口7%、石28%であ

る。第271号は炉壁が多く56%を占め、羽口22%で溶解炉に伴う遺物が約8割であった。また、第273号土壙の遺物総量は極少で、炉壁のみの出土であった。

第270、271、273号土壙が位置するグリッドおよびピットからも铸造遺物は検出された。特に、K-11グリッドPit3からは、炉壁1、炉壁2が多く、滓1が主体である。全体に滓は大型化の傾向が見られ、滓4、滓5も少量ではあるが出土し、いずれも大型である。羽口片も多く出土し大型である。

金井遺跡B区铸造遺物計量グラフ



第4表 金井遺跡B区鑄造遺物計量表(3)

(g)

遺構名	鉄滓1	鉄滓2	鉄滓3	鉄滓4	鉄滓5	大型滓	白色滓	その他滓	鉄塊1	鉄塊2
K11GP1	705			75	5				5	
K11GP2	800			35						
K11GP3	1010			120	30					
K11GP4	715			75						
L12G	85			25					1	1
SB27	50	0	0	10	5	0	0	0	0	30
SB28				30						
SB29	0	0	0	15	0	0	0	0	10	6
SB30	25									20
SD54										
SD55										
SD58				10						5
SD59	45									
SD60	175			25						
SE15	10	1055				285				
SK265	6695	170	20	1205	675	0	31	0	15	100
SK270	255	5			20				1	25
SK271	1320									
L11G	5010			475	160		5	15	35	
SK273										
SS16SSK1	3220	230		1085	455	150		155	25	175
SS16SSK15	125	40		40	35		110	835	15	
SS16SSK2	5400	360	100	1380	530			70	50	445
SS17SSK1	1455	165	0	425	255	0	0	25	1	5
値計	27100	2025	120	5030	2170	435	146	1100	158	822

(g)

遺構名	炉壁1	炉壁2	炉壁3	炉壁4	粘土塊	羽口	木炭	石	鑄型	鉄製品
K11GP1	350	1270				585				
K11GP2	1480	1000				250		285	30	
K11GP3	1320	875			40	825			5	
K11GP4	1215	880			85	795		270		
L12G	30				5			5		
SB27	405	35	0	0	65	55	10	55	0	0
SB28	70	95				20		10		
SB29	60	0	0	100	10	25	1	15	0	0
SB30					25			1		
SD54					35					
SD55								45		
SD58							5	5		
SD59					30					
SD60		15				135	5	45		
SE15	1030				20	300		95	95	
SK265	550	515	0	0	315	270	26	231	5	20
SK270		10			125	50		195		
SK271	1400	1810			80	1270			15	
L11G	1450	365			455	415	10	365	50	5
SK273	310	20			25					
SS16SSK1	2255	850	285		550	1275	20	240		
SS16SSK15	245	220	375		105	65	10	1400		
SS16SSK2	3665	930	15		700	1060		900	55	
SS17SSK1	960	1360	10	0	650	2240	1	1480	120	0
値計	16795	10250	685	100	3320	9635	83	5642	375	25

V まとめ

埼玉県金井遺跡B区では、鎌倉時代後期において、梵鐘をはじめとした鑄銅鑄物の生産と鍋・釜などの鑄鉄鑄物の生産が行われていた。また、工房の空間利用や作業工程、鑄型や溶解炉、これらを製作するための道具や装置など鑄物生産に関する技術体系を解明する上で貴重な資料を提供する遺跡である。

今回の発掘調査により、鑄造遺構群は新たに2ヶ所検出され前回とあわせ17ヶ所にのぼる。遺跡の範囲は南側が不明であるものの、東西約120m、南北約120mである。特に、東に面した斜面を利用した鑄造遺構群が主体的生産の場となっている。第5鑄造遺構群～第13鑄造遺構群は規模が大きく生産された製品は梵鐘をはじめ、仏具用品全般におよぶものと考えられる。また、北側の今回検出した第16鑄造遺構群および第17鑄造遺構群は鑄型の検出が少量であるため生産された製品は確定できないものの、前回の調査成果と考え合わせれば、獣脚等の鑄型破片が第22号溝跡から出土していることから、仏具用品の生産が推定される。残念なことにこの第16鑄造遺構群と第17鑄造遺構群の間は掘削を受け遺構が残存しなかった。

最も北側の斜面部には第14鑄造遺構群と第15号鑄造遺構群が存在する。第14鑄造遺構群からは容器鑄型が据え付けられた状態で検出された。また、第15遺構群からは獣脚鑄型が検出され、仏具用品の生産が行われていたものと考えられる。これらの生産場所は標高28～29.5m付近の斜面を利用した生産である。

標高30m付近の台地平坦部分には溝によって区画された第2・3・4鑄造遺構群などの土壙群が存在する。多くの土壙は浅く、不整形である。また、粘土採掘壙も存在する。この他、第85号、第117号、第118号土壙にみられるような竪穴状遺構も検出された。第85号は床面から鍛冶炉を検出した。また、第117号の床面からは円形の唐草文様が彫り込まれた鑄型を検出した。

遺跡南西のO-7・8・9グリッドから南側には鑄造遺構の存在は無く、無数の柱穴が検出されているこ

とから、居住空間として利用されていたものと考えられる。この、空間を挟んで西側に第1鑄造遺構群を検出した。これまでの斜面地を利用した遺構とは異なり、平坦地に掘り込みをもち、貼り床された作業場に溶解炉を据え、鑄型を固定し鑄込みを行ったものと推定される。検出した鑄型は鍋、容器、鋤先である。

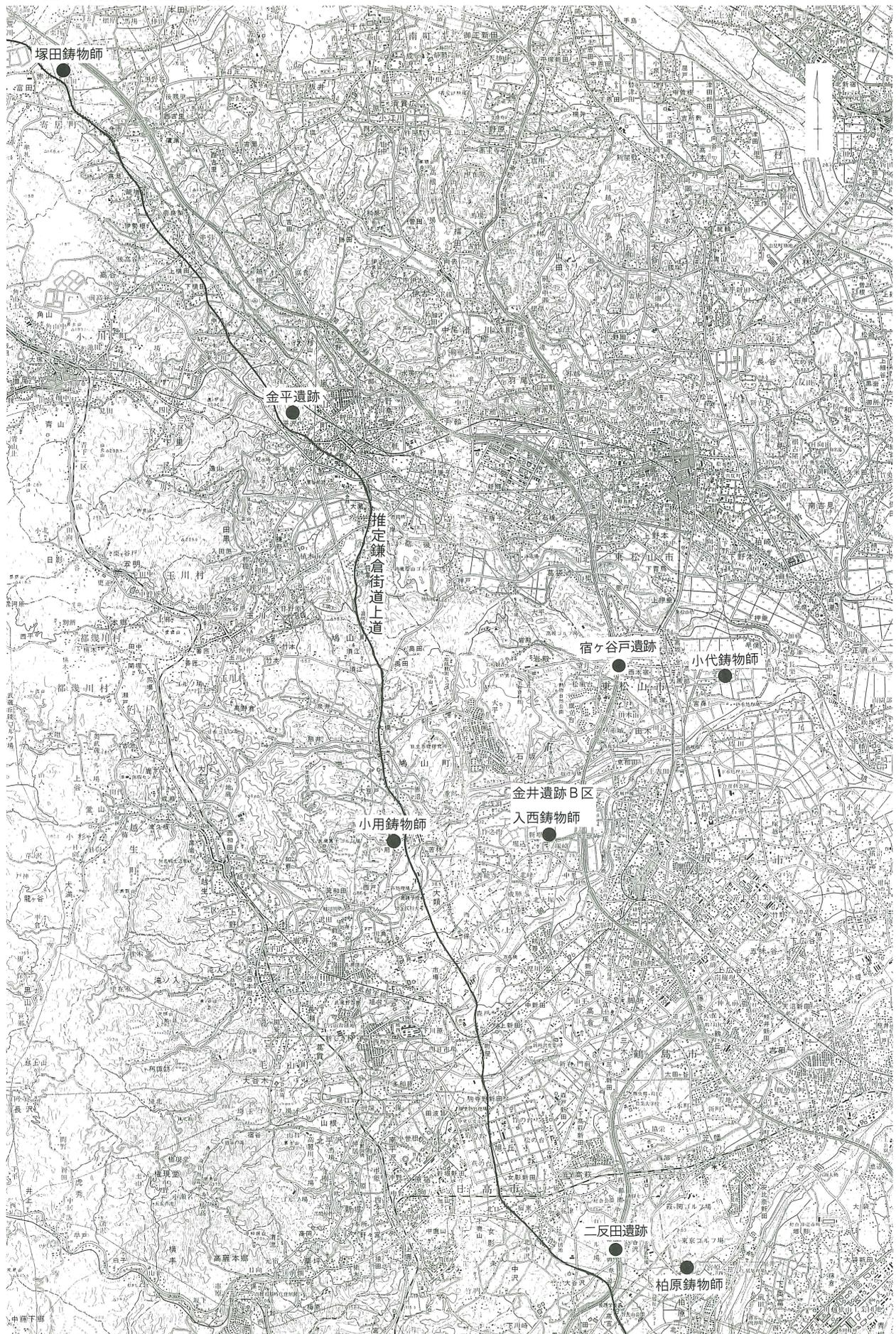
このように、金井遺跡B区は作業空間を分け鑄造活動を行っていたことが理解された。しかし、ここでの生産期間や本貫地とした鑄物師については不明である。

埼玉県内には、これまでに中世の鑄造遺跡が、鎌倉街道上道に沿って点在していることが明らかになった。日高町二反田遺跡、坂戸市金井遺跡B区、東松山市宿ヶ谷戸遺跡、嵐山町金平遺跡、児玉町上一ノ堰遺跡の存在が知られる。金平遺跡からは、「口友 弘安二二」（弘安四年・1281年）銘の鑄型片が出土し鑄造遺跡の年代が確定した。

また、中世後期から近世にかけて在地に本貫地をもち操業していた鑄物師の痕跡も認められる。第62図に示したように、柏原鑄物師、小用鑄物師、小代鑄物師、塚田鑄物師、金屋鑄物師等が知られる。

鎌倉時代、関東の鑄物師に大きな転換をもたらしたのは、高德院国宝銅造阿弥陀如来坐像の鑄造であると考えられる。いわゆる、鎌倉の大仏の鑄造である。「吾妻鏡」建長四年（1252）八月七日の条に、今日彼岸第七日、深沢里奉鑄金銅八丈釈迦如来像とある。このとき、関東の鑄物師がどのような組織で製作したのかは不明であるが、河内鑄物師の丹治久友が新大仏鑄物師として名が残されており、河内丹南の鑄物師の技術が関東にもたらされたと考えられる。川越養寿院に残る文応元年（1260）の梵鐘には丹治久友・大江真重の名が見られる。一方、関東の代表的鑄物師物部重光は都幾川慈光寺や鎌倉建長寺の梵鐘鑄造に名が見られる。鎌倉大仏の鑄造を継起として、関東の鑄造活動が大きく変化したものと考えられる。今後、こうした鑄物師の問題について検討を進めていきたい。

第62図 鑄造遺物出土分布図





引用参考文献

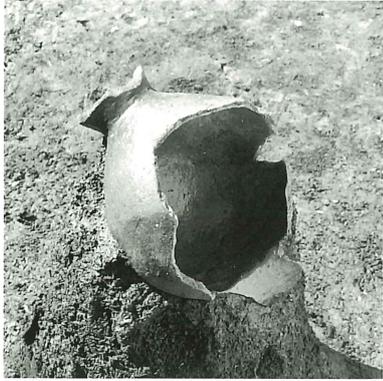
- | | |
|-----------|--------------------------------------|
| 赤熊浩一 | 1994 『金井遺跡B区』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第146集 |
| 埼玉県立歴史資料館 | 1983 『鎌倉街道上道』 歴史の道調査報告書 第一集 埼玉県教育委員会 |
| 倉吉市教育委員会 | 1986 『倉吉の鋳物師』 |
| 坪井良平 | 1970 『日本の梵鐘』 角川書店 |

新旧対照表

新 番 号	旧 番 号	新 番 号	旧 番 号	新 番 号	旧 番 号
SK85	SK112	SB30-P14	SB30-P3	SB32-P	P8グリッド-P41
SK292	SS18	SB30-P15	Noなし	SB32-P	P8グリッド-P56
		SB30-P16	SB30-P4	SB32-P	P8グリッド-P61
SB27-P1	SB27-P11	SB30-P17	SB30-P5	SB32-P	P8グリッド-P47
SB27-P2	SB27-P12	SB30-P18	SB29-P10	SB32-P	Noなし
SB27-P3	SB27-P15	SB30-P19	SB30-P7	SB32-P	P8グリッド-P34
SB27-P4	SB27-P3			SB32-P	P8グリッド-P19
SB27-P5	SB27-P6	SB31-P1	SB31-P57	SB32-P	P8グリッド-P16
SB27-P6	N10グリッド-P78	SB31-P2	SB31-P56		
SB27-P7	SB28-P8	SB31-P3	SB31-P55	SB33-P	Noなし
SB27-P8	SB28-P9	SB31-P4	SB31-P54	SB33-P	Noなし
SB27-P9	SB28-P15	SB31-P5	SB31-P53	SB33-P	O8グリッド-P2
SB27-P10	N10グリッド-P62	SB31-P6	SB31-P52	SB33-P	P8グリッド-P51
SB27-P11	SB27-P10	SB31-P7	SB31-P51	SB33-P	P8グリッド-P73
SB27-P12	N10グリッド-P14	SB31-P8	SB31-P50	SB33-P	P8グリッド-P57
SB27-P13	SB27-P18	SB31-P9	SB31-P49	SB33-P	Noなし
SB27-P14	Noなし	SB31-P10	SB31-P48	SB33-P	Noなし
		SB31-P11	SB31-P46	SB33-P	P8グリッド-P20
SB28-P1	SB28-P1	SB31-P12	SB31-P44	SB33-P	P8グリッド-P13
SB28-P2	SB28-P3	SB31-P13	SB31-P42		
SB28-P3	SB28-P4	SB31-P14	SB31-P40	SB34-P	P8グリッド-P6
SB28-P4	SB28-P5	SB31-P15	SB31-P30	SB34-P	Noなし
SB28-P5	SB27-P8	SB31-P16	SB31-P31	SB34-P	P8グリッド-P72
SB28-P6	SB28-P9	SB31-P17	SB31-P33	SB34-P	P8グリッド-P53
SB28-P7	SB28-P10	SB31-P18	SB31-P34	SB34-P	P8グリッド-P75
SB28-P8	N10グリッド-P63	SB31-P19	SB31-P36	SB34-P	P8グリッド-P46
		SB31-P20	SB31-P37	SB34-P	Noなし
SB29-P1	N11グリッド-P9	SB31-P21	SB31-P38	SB34-P	P8グリッド-P32・33
SB29-P2	SB29-P11	SB31-P22	SB31-P39	SB34-P	P8グリッド-P12
SB29-P3	SB29-P12	SB31-P23	SB31-P41		
SB29-P4	N11グリッド-P14	SB31-P24	SB31-P43	SB35-P	O9グリッド-P28
SB29-P5	Noなし	SB31-P25	SB31-P45	SB35-P	O9グリッド-P41
SB29-P6	Noなし	SB31-P26	SB31-P47	SB35-P	P9グリッド-P53
SB29-P7	Noなし	SB31-P27	SB31-P29	SB35-P	P9グリッド-P54
SB29-P8	Noなし	SB31-P28	SB31-P28	SB35-P	P9グリッド-P56
SB29-P9	Noなし	SB31-P29	SB31-P27	SB35-P	P9グリッド-P19
SB29-P10	SB29-P20	SB31-P30	SB31-P26	SB35-P	P9グリッド-P16
SB29-P11	N10グリッド-P37	SB31-P31	SB31-P25	SB35-P	O9グリッド-P5
SB29-P12	N10グリッド-P38	SB31-P32	SB31-P22	SB35-P	O9グリッド-P18
SB29-P13	N10グリッド-P58	SB31-P33	SB31-P18		
SB29-P14	N10グリッド-P74	SB31-P34	SB31-P13	SB36-P	O9グリッド-P14
SB29-P15	N10グリッド-P43			SB36-P	O9グリッド-P21
SB29-P16	SB29-P6	SB31-P35	SB31-P9	SB36-P	O9グリッド-P31
SB29-P17	SB29-P16	SB31-P36	SB31-P1	SB36-P	Noなし
SB29-P18	SB29-P7	SB31-P37	SB31-P2	SB36-P	O9グリッド-P44
SB29-P19	SB29-P9	SB31-P38	SB31-P3	SB36-P	P9グリッド-P9
SB29-P20	SB29-P15	SB31-P39	SB31-P5	SB36-P	P9グリッド-P57
SB29-P21	N10グリッド-P52	SB31-P40	SB31-P6	SB36-P	Noなし
SB29-P22	SB29-P14	SB31-P41	SB31-P7	SB36-P	P9グリッド-P23
SB29-P23	N10グリッド-P53	SB31-P42	SB31-P8		
SB29-P24	SB29-P13	SB31-P43	SB31-P12		
		SB31-P44	SB31-P21		
SB30-P1	N10グリッド-P48	SB31-P45	SB31-P20		
SB30-P2	N10グリッド-P46	SB31-P46	SB31-P19		
SB30-P3	N10グリッド-P45	SB31-P47	SB31-P14		
SB30-P4	SS16-P17	SB31-P48	Noなし		
SB30-P5	SS16-P15	SB31-P49	SB31-P10		
SB30-P6	Noなし	SB31-P50	SB31-P11		
SB30-P7	Noなし	SB31-P51	SB31-P16		
SB30-P8	Noなし	SB31-P52	SB31-P15		
SB30-P9	SB30-P6				
SB30-P10	SB30-P1	SB31-P1	P8グリッド-P1		
SB30-P11	N10グリッド-P14	SB31-P2	P8グリッド-P10		
SB30-P12	N10グリッド-P18	SB31-P3	P8グリッド-P24		
SB30-P13	SB27-P17	SB31-P4	P8グリッド-P40		

写真図版

第32号住居跡



遺物出土状況



第32号住居跡竈



A地点南側遺構分布状況（東から）



第16鑄造遺構群 (SSK1・2)



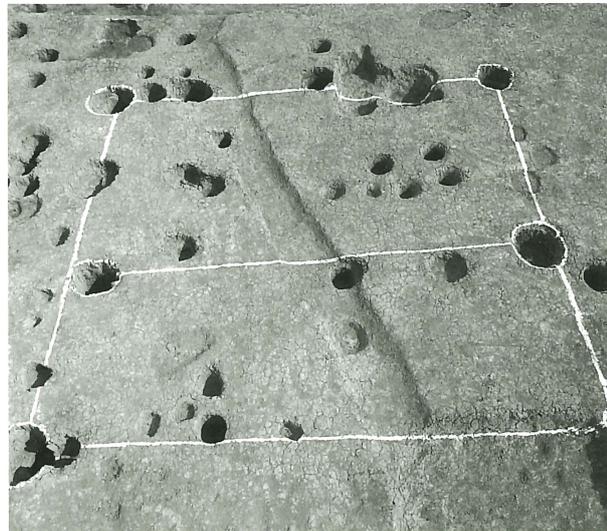
第16鑄造遺構群 (SSK3・10・11)



第17鑄造遺構群 (SSK1~3)



第272・273号土壤 (粘土採掘壙)



第28号掘立柱建物跡



第15号井戸跡



第54・55号溝跡



第56号溝跡



第59号溝跡



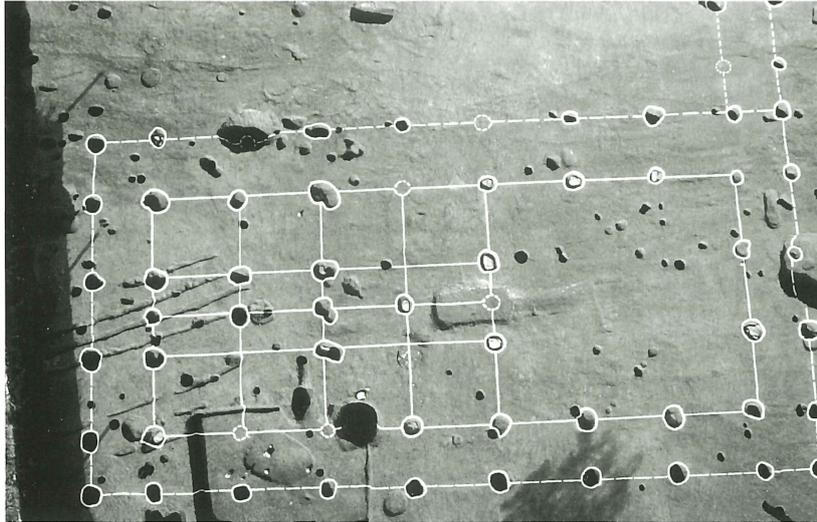
第17号火葬墓



第112号土壇（竪穴状遺構）



第292号土壇（竪穴状遺構）



第31号掘立柱建物跡



P16



P23



P28



P31



P32



P39



P40



P41



P44



P45



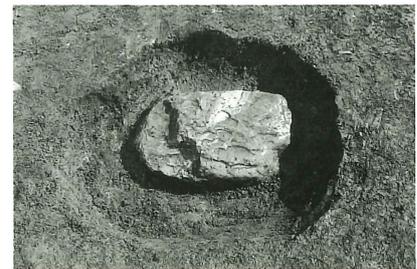
P46



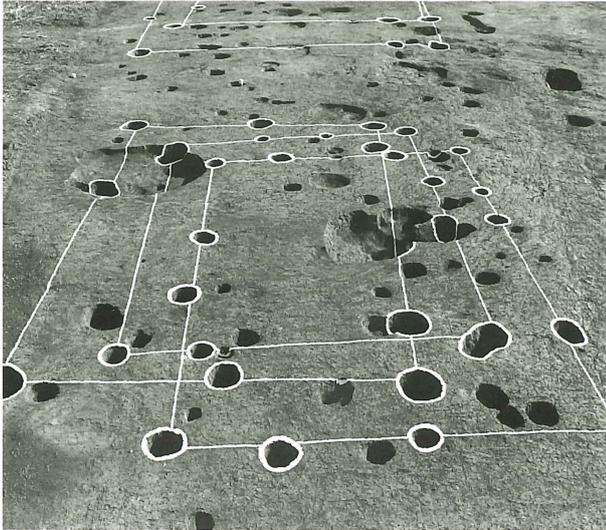
P49



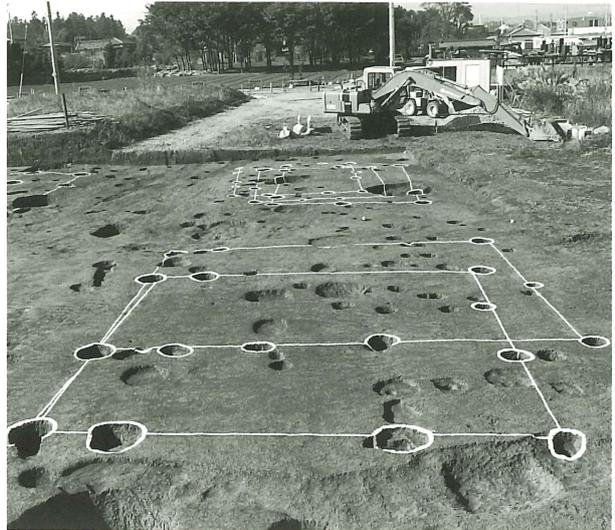
P50



P51



第32・33・34号掘立柱建物跡



第35・36号掘立柱建物跡



第17号井戸跡



第277号土壇



第283号土壇



第284号土壇



第32号住居跡出土遺物 (第11図3)



第60号溝跡出土墨書土器 (第40図14)



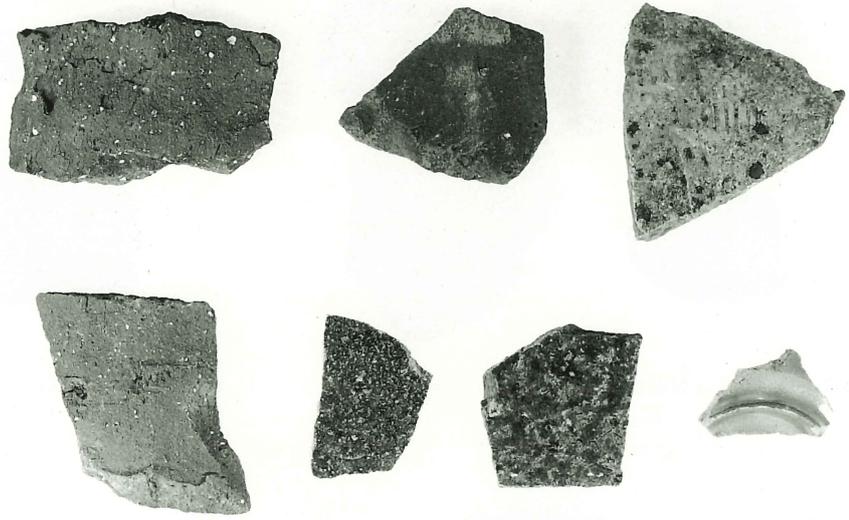
第271号土壙出土遺物



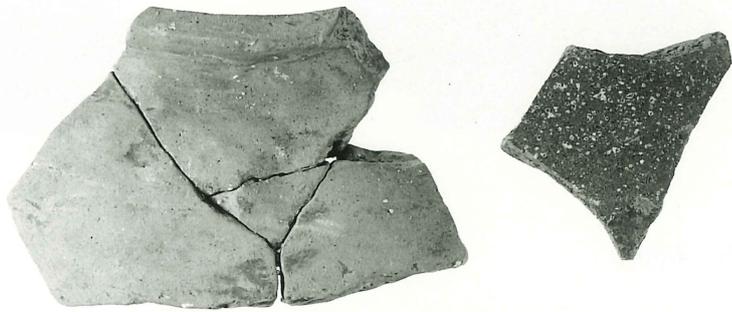
第279号土壙出土遺物 (第46図1)



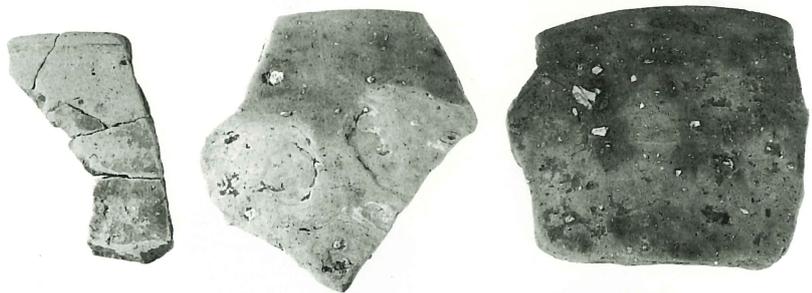
第15号井戸跡出土遺物 (I) (第36図)



第15号井戸跡出土遺物 (2)
(第36図)



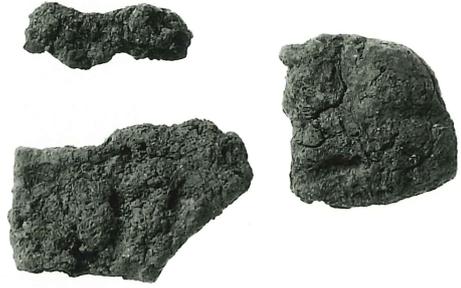
第16・17号井戸跡出土遺物
(第57図)



溝跡出土遺物 (第59図)



鑄型・とりべ (第61図)



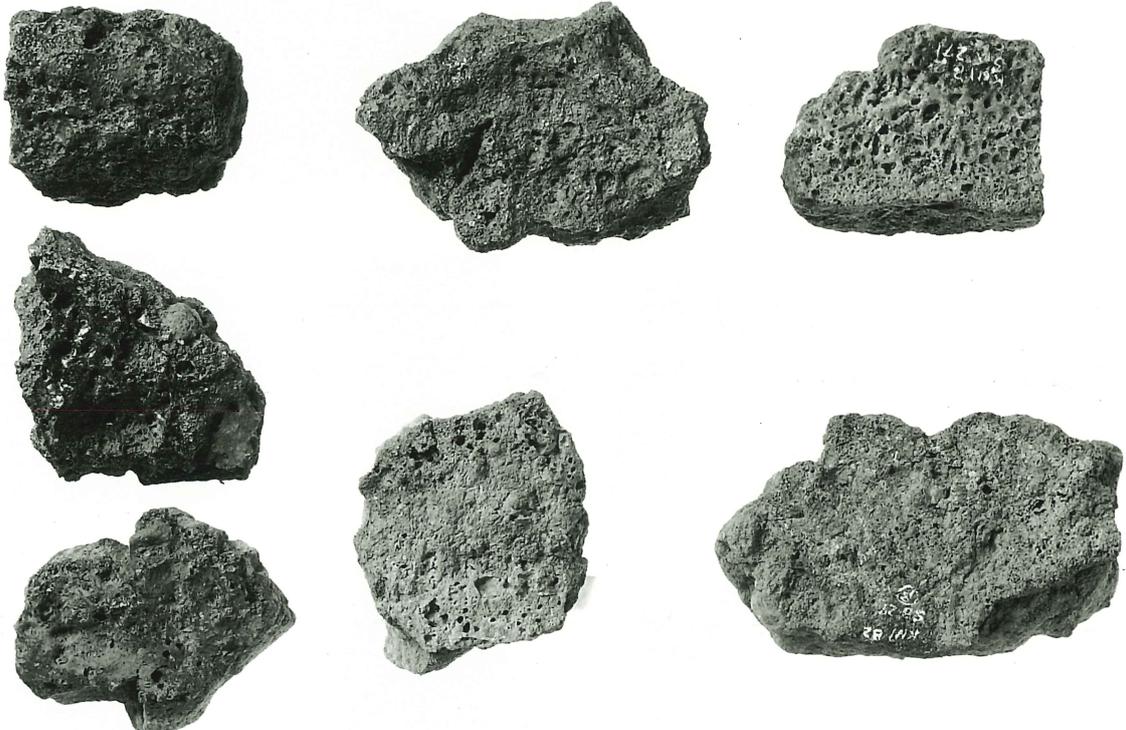
鉄製品 (第61図)



不明土製品 (第61図)



鉄滓・羽口 (第61図)



炉壁 (第61図)



鉄滓断面 (第61図10)



炉壁断面 (第61図12)



炉壁断面 (第61図13)



炉壁断面 (第61図14)



府敢写真 (第61図11)



府敢写真 (第61図18)



炉壁断面 (第61図11)



羽口断面 (第61図18)

報 告 書 抄 録

ふりがな	かないいせきびーくに							
書名	金井遺跡B区II							
副書名	住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	X							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第249集							
著者氏名	木戸春夫 赤熊浩一							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1 TEL0493-39-3955							
発行年月日	西暦2000(平成12)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かないいせき 金井遺跡	さいたまけんさかどし 埼玉県坂戸市 おおあざにいほり 大字新堀 あざかない 字金井 ばんちほか 330番地他	11239	118	35°57'56"	139°22'28"	19990401 ～ 19991130	1,715	区画整理事業に伴う事前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
金井遺跡B区	集落跡	古代 中世	住居跡3軒 井戸跡3基 溝跡12条 土壇29基 火葬墓2基 铸造土壇群2か所 掘立柱建物跡10棟	須恵器 土師器 陶磁器 鋳型 鉄滓				

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第249集

坂戸市

金井遺跡B区II

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

— X —

平成12年 3月15日 印刷

平成12年 3月24日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 大里郡大里村船木台 4-4-1 番地
電話 0493(39)3955

印刷／株式会社秀飯舎